

第2回黄道光會議にのぞみて (續き)

寺 町 忠 行

(6)

以上、主客博士のお話を終りまして、會議に移りました。先づ山本先生の發言にて、(以下稱號を略さしていたゞき座談會風に、また括弧をもつて、その動作などをも書き入れつゝ話をすゝめてゆき度く存じます。)

山 本——誰だつたか、日食時の黄道光のスケッチをもつて居たね。

寺 町——私です。(白紙に巻いてもつて來たパステル畫の 定着してないスケッチを出す)。

ストラツトン——(それをとり 見入りつゝ) 日食中にこの星などこんなに澤山見えたのですか。

寺 町——いゝえ、それは黄道光の位置と大きさを示すために入れたものです。星がどれだけに見えたかは本田君が實際體驗して居られるのだから。

本 田——(椅子より起つて山本夫人の後方に居る)いゝえそんなに見えません。しかし双子の附近は相當はつきり見えたのです。

荒 木——双子のどの星まで見えたのだい。α, β と。

本 田——2, 3等星まで見えた様に思ひます。何分にも黄道光を見るに一生懸命でしたから。

山 本——(寺町を指さし)こちらは現幹事の寺町君、そしてこのスケッチは寺町君が(本田を指さし)北海道の枝幸で觀測した記錄から描いたものですよ。(ストラツトン、山本の左にありてうなづく、ロイツはストラツトンの向ひ側にありてさつきから何本目かの煙草に火をつける。)

ストラツトン——(しばらく眺め入つて後、ロイツの方に畫を差出して) どうですか。(ロイツ目鏡に手をやりつゝ見入る。)

荒 木——君!(寺町の方に)その記錄もつてるのか。

寺 町——はゝもつてます。出しませう。(起上つて鞆をとり、記錄その他を出す。)

山本——(記録をとりて)これがその日食時の黄道光の記録ですよ。

ストラットン——(それに見入り、ふと手にパステルの粉がついてるに氣付き)わぁこんなになつた。この目のおほひにしたものは星に對してどれ程の擴りにあつたのか。

本田——30糎の板を50糎程離れて見たのですが、それではコロナのひかりが邪魔になりもつと近づいたのですから。

荒木——(星圖を立つてのぞきこみ、寺町ものぞきこむ)20度だね。

寺町——20度ですね。

ストラットン——(起ち上りかけて、山本と話しながら)さぁ時間が來ましたからこれで。……皆さんごゆつくりと、これからは自由な日本語でお話下さい。(ストラットン、ロイツ挨拶し、握手して去る。今までは山本先生の通譯によつて話してたのです。)

(7)

ストラットン、ロイツ兩博士退出後會議は尙續けられました。

山本——さぁまだ時間がありますから續けませう。2人は一寸急いでゐられるものだから。

寺町——廿日市の淺野さんから宇野さん處へ、會議に讀んでいたどく様につて手紙が來てゐますから。

山本——それは惜しいことをした。

宇野——私から讀ませていただきます。(省略)

山本——一夜に於ける數回の觀測により頂點の偏りがどんな風に變化してゐるかやつてもらひたいね。この觀測から頂點を結ぶ線が黄道と交はるとなれば非常に面白いと思ふ。

寺町——出來ると思ひますから明るくなつてからやつてみませう。

山本——相當成績がよければ皆でやりたいね。或は無理かも知らんが。

寺町——忘れてゐましたが日食の日の夕方、富原さんが觀測されたスケッチがあります。

山本——だいぶ頂點が尖つてゐるね。こんなに見えるかな。濠州のバウスフィールドの觀測もとがつてゐるが、あそこのはまだ幼稚だね。

寺町——黄道光全體の形はレンズ形ぢやないでせうか。私の昨年6月1日西天の觀測と、6月2日東天の觀測とは中心線の傾斜、形共に一致して、レンズ形をなしますが。

荒木——明るさは？

寺町——さはつきり記憶してゐませんが。

本田——日食の黄道光は6月の東天よりも明るく感じました。

荒木——その用紙に書いてあるか。

寺町——ありません。

荒木——書いとけ、書いとけ。

山本——月の黄道光は。

廣瀬——寺町さんが見てられるんぢやないですか。

寺町——いいえ、あれは月のあるときのですよ。

福井——月のあるときも見られますか。

寺町——見えますね。月が餘程離れてあるときに。

宇野——僕は月の黄道光を見ました。

荒木——それはどんなだつた。月は黄道と離れてゐたか、それとも一致してゐたときか。

宇野——一致してるときでした。

山本——月が没してからどれ程して。

宇野——1時間程でせうか。

寺町——漢口の笹部さんから揚子江を上る船上から見られたのがあります。それに依ると階段的に明るい云ふことです。

山本——それは氣象的關係にもよりますかね。

荒木——それは中心部の明度を示し、等光線を粗にとりすぎたため、或は等光線附近はうすれてゐるのでせう。

宇野——黄道光につやのあるのが見えますね。

寺町——えゝ、輝いた色を持つてゐるのが。

渡邊——僕は見ませんが。

宇野——あれなんかも氣象的原因に依るんぢやないですか。

寺町——そうですね。あれは明るいときによく見えますね。

宇野——そうですね。

寺町——黄道光の色は本當は青白色ぢやないでせうかね。

宇野——そう思えますね。

寺町——シーイングと色と比較してみたら、何か出ませんかね。

以上にて私の記憶はうすれて行つてゐます。その後、席を立つてあちらこちらに集り談笑し、湖の遠景にながめ入る等楽しい時を過しましたが、文中、記憶の前後してゐるところ、或は他にもつと大切なことがあります。私のきゝもらしてゐる點があることゝ存じますが、それらにつきましては御教正いたゞきまして、改めて「黄道光課課報」其他により訂正致し度存じます。黄道光課にとつては、まだ他の種々なことがありますが、これは「黄道光課課報」にて發表することとします。（おはり）

“日食と俳句”

日食の日に喰入るや栗の蟲 李 由 法 師 (1686年作)

お日様を蟲が喰ひけり秋の風 子 規 (1896年作)

日の神も病氣とやらこの残暑かな ”

日と月と重なりあふて書暗し ”

日食に満月の裏ぞ見られける ”

北海や日食見えす晝の霧 ”

日食すること八分芭蕉に風起る ”

蝕を待つ窓のアカシヤ輝ける 行 々 子 (1936年作)

アイヌ等も色ガラスもて蝕仰ぐ い ぶ き

月は日を抱き終りてコロナ燃ゆ 朝 羊

昏々と日が日が蝕す雲もみだれ 春 風

日の空に日は病み給ふ黒い月が ”

閃爍と日はおほらけく蝕了へり ”